

地域の強みを積極活用 市民協働で進める地域創生

《七夕の里》《恋人の聖地》で全国発信

今年7月3日(日)、小郡市で「七夕婚」と題する婚活イベントが開催され、マスコミでも大きな話題になった。同イベントは大手私鉄・西日本鉄道と、西鉄天神大牟田線の沿線に位置する小郡市との共催で、当日は全国からの応募者72名(学生を除く20歳〜45歳までの独身男女各36名)が参加。大盛況のうちに7組のカップルが成立した。人口減少の抑制と働き盛り世代の移住・定住化促進を目指す婚活イベントは、全国の自治体で行われており、形態も多様だ。中でも小郡市の七夕婚がひとさわ世論の話題を呼び、参加者たちの意欲をかき立てたのには、理由があった。

小郡市には神社庁に登録された神社としては唯一の「七夕神社(正式名称は媛社神社、祭神は織女神(織姫))」がある。その希少性と由

緒から、毎年恒例の夏祭り(8月7日)には、恋愛成就をはじめとする願いごとの短冊が全国から30万通以上も奉納される。

8世紀(奈良時代)創建とされる七夕神社の宝満川を挟んだ対岸には、宝満川を天の川に見立てて13世紀ごろに創建されたと伝わる牽牛社(祭神は牽牛けんぎゅう彦星、現在は老松宮に合祀ごうしされている)もある。

日本書紀に「筑紫小郡」と記された飛鳥時代の小郡には官衙(律令制下の郡役所)が築かれ、小郡は筑紫地方の中心的役割を果たしていた。そうした歴史的背景とともに、五節句として七夕が中国から移入され、広く祭礼化していくのがこの時期である事実を考慮すれば、大陸からの入口・九州で同時代に創建され、七夕伝説とのつながりに特化した由緒を持つ七夕神社の重みは、より一層増す。

七夕神社と周辺地域は平成25年、NPO法人地域活性化支援センターによる「少子化対策と地域活性化への貢献」を図る事業《恋人の

ひらやすまさとも
平安正知
小郡市長

聖地》プロジェクトの一環として、「プロジェクトにふさわしいロマンティックなスポット」恋人の聖地」の一つにも選定されている。

「小郡市では以前から《七夕の里》を発信し、七夕神社を重要なイメージ核に据えておりました。さらに《恋人の聖地》に選定されたことを契機に《七夕の里》と《恋人の聖地》をセットにし、子育て世代への小郡市の認知度を高める格好のイメージアイテムに





全国から届いた短冊がひるがえる七夕神社の夏祭り(上段)と境内正面



七夕神社と並ぶ人気デートスポット「如意輪寺(かえる寺)」



七夕の里の観光大使・ゆるキャラのオリリン(右)とヒコリン(毎年3月開催の小郡ハーフマラソン大会)

するなど、さまざまな形で活用させていただいております」

そう語るのは平安正知市長だ。平安市長は婚活イベントの盛況ぶりを率直に喜びつつも、「それはあくまでも小郡市の本質的な部分での良さ、暮らしやすさなどを婚活世代に知っていただくための、キッカケづくりの一つと考えています」と冷静に続ける。

その背景には、『七夕の里』や『恋人の聖地』をキッカケに、住環境の良さや数々の子育て環境の良さなどを知ってもらえれば、子育て

世代および婚活中の人に小郡市への強い関心を持つても

らせるはず——とのひそかな自負が感じられる。例えば今年3月に策定した「小郡市まち・ひと・しごと創生総合戦略」には『恋来い！おごおり創生戦略』という、七夕の里・恋人の聖地を意識した、新市民を呼び込むための絶妙な愛称が付されている。そうしたイメージだけの問題でなく、小郡市を包み込む客観的な諸条件を子細に見ていけば、小郡市にはそれだけの多彩なポテンシャル・底力のあることが、おのずと分かってくる。

クロスロード地域の多彩なポテンシャル

例えば交通面の利便性を見てみよう。東西約6km、南北約12kmの小郡市には、前出の西

鉄天神大牟田線が南北を貫いている。西鉄と並行して市域西側(市域外)を走るJR鹿児島本線のJR基山駅からは、第三セクター・甘木鉄道が枝分かれして延び、小郡市域を東西に貫いている。2つの私鉄の駅は市内に計12もあり、市役所最寄りの「西鉄小郡駅」から、九州最大の福岡都市圏(西鉄福岡・天神駅)まで、約30分で結ばれている。

小郡市が共に構築する久留米広域連携中枢都市圏の中心都市・久留米市までなら、約10分の至近距離となる。

また市域西側に隣接する鳥栖市(佐賀県)の鳥栖JCTでは、福岡方面から鹿児島方面へ南下する九州自動車道と、小郡市域を東西に横断する大分自動車道(JCT以東。JCT以西は長崎自動車道)が交差している。この



市民に好評の出前講座(災害図上訓練の様様)



旧松崎宿の出入り口跡(南構口)



観光客にも人気の「夢HANABI」(毎年8月)

シヤルを広域連携でより幅広く生かす試みとして、小郡市は平成25年、筑後川が形成した筑紫平野内に隣接する久留米市・鳥栖市(佐賀

高速道路網を活用すれば、福岡空港まで約35分、熊本市には約80分、長崎市には90分強、佐賀市へは約20分で着く。さらに大分自動車道・筑後小郡IC(小郡市域東側)を使えば、大分市まで100分で着く。

最大の特徴は鉄道網・高速自動車道網ともに、小郡市とその周辺地域で十字にクロスしていることだ。しかも小郡市や鳥栖市の位置する筑紫平野は、九州最大の文化・経済圏を構築する福岡県(北部九州)の西南端に位置し、古来、基幹街道や筑後川の水運などで九州各地と結ばれてきた結節点に当たる。九州内を東西南北どこへ向かうにも、またどこから来るにも便利な、まさに「クロスロード地域」の役割を果たしてきた。

クロスロード地域の持つ地理的優位性は

業団地の分譲を推進している。干潟第2工業団地は大分自動車道・筑後小郡ICからわずか1km、鳥栖JCTからでも約8kmの至近距離だ。

「九州のへソに位置し、東西南北と係する交通環境を持つ干潟第2工業団地は、物流センターなどの立地に最適です。製造業で進出を考える企業にとっても、出荷・集荷が容易なこの地域の交通環境は魅力的でしょう。新たな雇用の場の創出のためにも、ぜひこの工業団地を活用していただきたいと思えます。また小郡市の基幹産業は農業ですが、将来的に六次産業化などが進捗すれば、九州各地への出荷・集荷が容易な環境は大きな武器になります」(平安市長)

こうした地理的特性・交通環境のポテン

県)・基山町(佐賀県)とともに「筑後川流域クロスロード地域ビジョン」を共同で策定。「人・モノ・情報が集まる九州の総合交流拠点」自然環境と都市機能が高次元で融合した快適住環境地域「豊富な資源や多彩な魅力が集約された吸引力ある地域」の実現を「目指す地域像」に掲げて、折に触れ連携活動を実施している(実施期間は平成34年まで)。

加えて昨年10月には、鳥栖JCT周辺の鳥栖市・小郡市、さらには甘木鉄道の起点でもある基山町を加えた2市1町による、「九州ブランドディング拠点創生特区(国家戦略特区)」の申請を共同で行った。

「筑後川流域クロスロード地域ビジョン」は、将来的に道州制が導入された場合を想定し、同地域への州都の誘致を目指すとともに、地域全体の個性の確立、魅力と活力のある地域全体の創造、共通する地域課題の解決などを目指すため、ビジョンを策定したという背景がある。残念ながら道州制の論議が盛

小郡市

(福岡県)

市 政 報

んでなくなっているため、現状では目的の部分で時宜に合わない面も出てきてはいる。

しかし、同じクロスロード地域に立地する都市の広域連携の意義は、昨年10月に共同申請した「九州ブランディング拠点創生特区」にかなりの部分、包含されている。むしろ同特区への取り組みは、クロスロード地域の特性・優位性を、産業面および農業面への活性化に特化した方向性を打ち出ししており、目的がより具体的かつ明確になったともいえる。

「教育環境」「食と農」で 子育て世代へアピール

「九州でもまだ5つだけの連携中核都市圏域(取材時でビジョン策定済)に属するとともに、県境を越えた九州ブランディング拠点創生特区を推進しようとする取り組みは、小郡市と周辺地域が九州全体における要衝地域、モデル的地域であるべきだ」という強い自覚から発しています(平安市長)

クロスロード地域特有の地理的特性や交通環境の優位性は、小郡市の人口動態にも端的に現れている。小郡市の市制施行当時(昭和47年)の人口は約3万人。以後、平成26年度(約5万9500人)まで右肩上がりて人口を伸ばしてきた。

平成28年6月現在では約5万9000人と初めて漸減傾向を見せ、高齢化も急速に進み

つつある。それでも市内では現在、3カ所設計600軒もの家族向け宅地開発および住宅建設が進められており、しかも開発地は小学校への通学に便利な場所を官民の連携で選ぶなど、子育て世代を意識したきめの細かい配慮を施している。

小郡市の転出率の低さを考えれば、これら家族向け住宅建設による入居数を1軒当たり3人と単純計算しただけで、人口は平成26年度のピーク時に復す計算が立つ。さらに高齢化の進捗で自然減が増えるにしても、家族向け新築住宅団地の入居想定対象を子育て世代にシフトすれば、合計特殊出生率の上昇も可能と、小郡市では推計する(※小郡市では2040年に人口6万〜6万1000人、2060年に5万5000人〜5万7000人と展望している)。

また小郡市の市域は8つの小学校区で構成されているが、快適な教育環境の維持を図るため、中学校の大規模改造を継続的に進め



小郡市内に5つの駅をもつ第三セクター・甘木鉄道



奈良時代に設けられた小郡官衙遺跡(国指定史跡)

ている。それに伴い、力を入れているのが小学校での自校式給食の推進だ。8校のうち3校が既に自校式給食を実施し、今年度中にさらに2校が自校式給食になるという。「センター方式を改めることで、各校がメニューの工夫を独自に行い、出来立ての給食を楽しみながら、地産地消をはじめ食育の効果も図れる。またモデル的に給食室の横にランチルームを併設し、給食を作る様子を見ることができるようにし、将来的には地域の方たちにも希望制で給食の試食をしていただくなど、さまざまな企画を考えています。運営面の合理性では劣っても、自校式給食にすることで、そうしたコミュニケーションぐるみの食育も図れる。これは農業振興の面からも非常に大きな力になるのではないかと考えていま



恒例の小郡音楽祭の一環として公演されるミュージカル『ONE!～世界を変える少女』には市長も出演(今年9月3日・4日)

す(平安市長)

ベッドタウンとして人口を順調に伸ばす一方、平坦な大地と温暖な気候、豊富な水資源に恵まれた小郡市の基幹産業は今も米作を中心とする農業だ。「九州ブランドینگ拠点創生特区」の最重要テーマの一つが農業面の幅広い活性化・振興であるのを見ても分かるように、それは小郡市が位置する筑紫平野全体にいえることだ。

こうした優れた農環境を市民の健康増進にも役立てるため、小郡市は平成25年に「小郡市食料・農業・農村基本条例」を制定。「食と農」の密接な関係を市民協働ではぐくむとともに、高付加価値作物の栽培など、基幹産業としての農のさらなる発展も期している。

また全国学力・学習状況調査において、小郡市の小中学校の平均学力は全国平均を上回っている。このように優れた教育環境の裏付けとともに、自校式給食の推進など「食と農」の密接な関係の構築を図ろうとする市の将来を見据えた姿勢は、これから先、子育て世代の共感を呼び込む大きな力を発揮するのではないだろうか。

地域課題の克服に向けた市民の地域愛

もう一つ注目されるのは、市民アンケート調査をするたびに、市民の8割以上が「小郡市に住み続けたい」と回答する、市民による地域愛の強さだ。一方で、小郡市の抱える目下最大の地域課題は「市内各地域の環境差」と平安市長は語る。地域の北部・西部は小郡市の拠点地区と新興住宅地が集中、東部・南部は田園地帯で占められている。今後は各々の地域の特質を生かしながら、いかに生活機能面での環境差などを解消していくかが問われてくるが、これまで述べてきたクロスロード地域としての強みの推進を図る各施策・事業には、こうした側面へのアプローチとなる要素も多分に含まれており、今後の推移が注目される。

小郡市では、地域差の解消を含めた各地域課題の克服および活性化について、市民協働事業(小学校区単位で構築するまちづくり協



縄文時代以降の出土品に触れられる小郡市埋蔵文化財調査センター



市民からの人気も高い市立陸上競技場は堂々の陸連2種公認コース

小郡市

市 政 ル ポ

(福岡県)

議会による活動など)による取り組みも強力に推進している。

今回の取材では、旧薩摩街道の宿場町・松崎地区(立石小学校区の一部)における歴史を生かしたまちづくり、「のぞみが丘小学校区」の「自治会バスの運営」という、「強い地域愛」に根差したそれぞれに特徴的な取り組みを取材させていただいた。

松崎地区を通る薩摩街道は江戸時代、薩摩藩の参勤交代ルートだった。また九州のどこへ行くにも都合のいいクロスロードの地域特性は、幕末期における維新の志士たちの盛んな往来を呼び込んだ。

今も歴史的な町並みの残る松崎地区には、本陣に次ぐ格式の旅館「油屋」の遺構が残されている。NPO法人「小郡市の歴史を守る会」

(磯部富士夫理事長)は松崎地区全体の歴史遺産の維持・継承とともに、油屋の復原を目指している。油屋の復原工事は平成30年に完成予定だが、完成後は多目的施設としての活用とともに、将来的な宿泊施設機能の付加も検討するなど、夢は広がるばかりだ。

大野城市の事例を参考に、地域の実情に合わせて構築した自治会バスの運



九州史の殿堂・九州歴史資料館(福岡県立)



自治会バス・ベレッサ号のボランティア運転手さんと運営委員会の模様

営事業(のぞみが丘小学校区)は、平成23年4月に開始された。

地方都市の公共交通、特にバス交通は採算性の問題などから路線の廃止や統合が続発している。人口が急増した新興住宅地区であるのぞみが丘小学校区には、市中心部とを結ぶ路線バスが平成21年まで走っていたが、同年実施の高速道路無料化などの煽りで、バス会社の財政状況が悪化、突然の路線廃止が行われた。その結果、高齢者だけでなく、バスを通勤通学の足にしていた市民も困った。そこで誕生したのが、市民ボランティアが運行のすべてを維持・管理する自治会バス「ベレッサ号」だ(ベレッサ号の名称は最初に車両提供してくれた地元商業施設の商号にちなんでいる)。

「路線バス廃止の2年後に実際の運行が開

始されるまでには、バス協議会の立ち上げからボランティア運転手の確保、その後の維持管理体制の構築に至るまで、地域の大変なご苦労がありました。しかも立ち上げ以降、今日までの5年間を大きな事故もなく運行されてきたご努力には、本当に頭の下がる思いしかありません(平安市長)

クロスロード地域の環境的優位性を基に人口を順調に伸ばし、都市的機能を拡充させてきた小郡市。「これからの未来」はそれに加え、《七夕の里》《恋人の聖地》にふさわしい市民の強い地域愛と、その地域愛が醸し出すフレンドリーな雰囲気引かれ、新住民になる人たちの新たな地域愛との合体が、大きな原動力になっていくのではないだろうか。

(取材・文 遠藤 隆／取材日平成28年8月9日)